

文語の苑

メールマガジン第二十四号（平成二十五年六月）

宇宙開発事業団

昭和四十四年一月当時科学技術庁の首席事務官たりし余馬場官房長室に呼出されぬ。官房長事務的に要求せざりし予算急遽政治的につくことと相成りし由を告げ、そのため必要な関連法案の準備に取掛かるべきを指示す。予算関連法案のための次官会議には厳しき締切あり、時間的余裕を勘案すればその指示はほぼ不可能事なりき。

当時宇宙開発に関しては東大と科学技術庁の間に競争あり。東大は研究目的の衛星打上げに関心あり、固体燃料に基づくロケットの独自研究開発を進めつつあり。これに対し衛星の利用に関心を有する科学技術庁はより実用的なる液体燃料に関心を示し、研究調整局航空宇宙課の中に宇宙開発推進室を設け対抗す。

されど遅遅として進まぬ宇宙開発に業を煮したる自民党内の科学技術議員連盟の小宮山議員以下大蔵省と直接折衝して宇宙開発事業団の設立に要する予算を獲得せしなり。

宇宙開発事業団そのものの設立準備は研究調整局の謝敷参事官総指揮者となり、余は法律案作成の責任者となる。官房及び研究調整局の事務官を動員して特別班を組織し、会議室の一を法案準備室に模様替へし、これを根拠地として以後余事を擲ちこの一事に専念す。法案は原子力開発関連法令にその先例あり、これを土台と為さば特に難きことにあらず。なすべきは二あり、一は法制局審議を無事了すること、二は次官会議を通すため必要な関係各省の根回しなり。さなきだに法制局審議は難物にして、法制局審議官による扱きは各省事務官の最も恐るところなり。法案の逐条審議に併行して関係省の了解を取付くる要あり。関係各省当方の足元を見て様々なる要求を突きつける様は正に外交場裡の如し。余はそれらの現場に東奔西走し、自ら処すことを得ざれば然るべく事務官を派して対応せしむ。折衝は連日深夜に及び、帰宅には常にタクシーを雇ふ。幸ひ謝敷参事官江古田の公務員宿舎我家の隣合せにして車を共にすること屢なりき。

数日にして関係者疲労困憊その極に達す。さい狼の如き各省に対しては覚書の濫発を以て応ず。覚書は破らるるため存すと嘯きつつ。法案提出の期限は辛うじて守られ、事業団法遂に陽の目を見る。その日謝敷参事官執務室にて倒れ、救急車にて虎ノ門病院へ搬送せらる。科学技術庁は寄合所帯にして各省より出向せる管理職ほぼ役立たずこのプロジェクトに寄与せるは謝敷参事官ただ一人なり。彼は沖縄出身、運輸省よりの出向なり。後船舶局長となる。

宇宙開発事業団その後宇宙航空開発機構に衣替へし、その種子島センターは多数のロケット成功裡に打上ぐ。されどその誕生に心血を注ぎし我等に打上げ見学の機会与へらるること更になし。他の国々にては如何ならむや。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第二十四号

小倉百人一首 二十二 藤原義孝

君がため 惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひけるかな

平安の王朝時代の戀の作法では、男が戀を得て、女の家で一夜を過ごした次の朝、男は女に歌を贈るものとされて居りました。古今集に「しののめのほがらほがらと明け行けばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」といふ(う)古歌があります。男女が一夜、二人の着物を上に懸けて共寝した後、朝になって各自自分の着物を着て別れて行く場景を歌った歌です。この歌から男女が一夜を過ごした後の朝のことを、「きぬぎぬ」の別れ、自宅に歸った男が女に贈る歌を、後朝、すなは(わ)ち「きぬぎぬ」の歌と申しました。この藤原義孝の歌は、詞書きに「人の許(もと)よりかへりて、つとめて(早朝に)」とあるや(よ)うに、後朝(きぬぎぬ)の歌です。

藤原義孝は名門の子弟で、類ひ(い)稀な美男だったと傳へ(え)られますから、女性関係は多かったや(よ)うですが、この歌が誰に贈られた歌だったかは分りません。「これまで別に長生きしたいと思つてゐ(い)なかったが、あなたと逢つて、長く生きたいと願ふや(よ)うになった」と詠ふ(う)気持は眞率です。作者は僅か二十一才で世を去ったのですから、この世の哀れを感じずには居られません。

藤原義孝の父、攝政・太政大臣として位人臣を極めた藤原伊尹これたは、藤原忠平の孫で、政治家として一流だっただけでなく、百人一首にも歌が採録されており、歌人としても、學者としても、また趣味人としても人に抜きん出た人でした。その上美男子ぶりでも天下に知られて居りましたが、性格的には傲慢なところがあり、派手好きで、贅沢な出費を惜しまなかったらしく、四十九才で亡くなったのは派手な生活のためだったとされます。

その三男だった義孝は、父の才能を受継いで歌がうまく、服装などの美的感覺は抜群で、極め付きの美男。それでゐ(い)ながら父の傲慢で派手好きな性格は受継がず、まじめで控へ(え)めな好青年だったや(よ)うです。母は皇族の出であり、申し分のない生れですから、若くして五位の近衛少将に任せられ、前任の一つ年上の兄は前少将、義孝は後少将と呼ばれて、容姿と才識を並び稱されました。ところがある年天然痘が流行し、一日のうちに前少将は朝、後少将は夕方に世を去ったと傳へ(え)られません。

そんな死に方をした二人の兄弟は世の人の哀惜の的となり、多くの傳説が語られました。そのや(よ)うな傳説の一つによれば、ある早春の月が明るい晩、義孝が平素は謹直なこの人にしては珍しく、宮廷の女房たちのたまりに来て話し込み、夜が更けて退出して行ったので、女房たちは氣になつて人に尾行させたところ、義孝は供の童一人を連れて夜の街を歩き、自分の家の氏寺に入つて行くと、境内の紅梅の花の下に立ち、西に向つて何度も拜禮を繰返しながら、朗々と法華經を誦したと云ひ(い)ます。

藤原義孝兄弟が天死したため、藤原氏の正統は父伊尹の弟の兼家とその子道長に移つて行きます。義孝の残した一子は、書道家として三蹟の一人に數へられる藤原行成ですが、この人は實務家としても有能で、道長の幕僚として政治を支へ(え)ました。

加藤淳平

文語の苑

メールマガジン第二十四号

とるや早苗は我が君のため 愛國百人一首を讀む(十九)

大御田のみなわもひぢもかきたれてとるや早苗は我が君のため 賀茂眞淵

大御田は天皇の田を表す詞ですが、一般に神社領の田を謂ひます。また一般國民を「おほみたから」と言ひますから、ここでは「おほみた」を一般の水田を指すと見ても差支へありません。その大御田で行はれる田植系では、水(水泡)やどろ(泥)が垂れ滴る肘、「ひぢ」が掛詞になつて、その袖肘で稲の苗を受取つて植ゑて行きます。これこそ我が國稻作文化を象徴する作業であり、「我が君のため」はかうした生業を通じて天皇に御仕へするのだと言ふと共に、この作業が大君に嘉納されることでもあるよと讀むことができます。

賀茂眞淵は前回採上げました荷田春滿に師事して、萬葉集の研究を始めとして、源氏物語、伊勢物語等の評釋を世に出して、國學の發展に大功を樹て、國學の四大人の一人に擧げられてゐます。しかし一方で、眞淵は右の歌のやうに、大君と稻作といふ日本文化の本質的な構成部分に眼を向けてゐます。古事記にありますやうに「豊葦原の千秋長五百秋の水穂國は我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命の治らす國なり」、また「この豊葦原瑞穂國は汝治らすむ國なりと言依さし給ふ。かれ、命のままに天降るべし」と邇邇藝命に詔おほせられたとほり、稻作作業特に田植系がこれを象徴してゐると感じた眞淵の心情が讀み取れます。

かつした日本文化に對する深い理解と愛情に立脚したからこそ、眞淵の國學は門下に本居宣長、村田春海、香取魚彦、加藤千陰などの偉材を輩出して、大いなる發展を遂げたのです。特に寶曆十三年、三十五歳の宣長が眞淵の來遊を聞いてその跡を追ふも尋ね當らず、數日の後奇蹟的に面謁を果し、眞淵に古事記注解の心得を授かつた挿話は「松坂の一夜」としてよく知られてゐます。因に宣長の古事記傳完成は爾後三十五年の歳月を閲することになります。

今日日本の稻作は大きな試煉を迎へようとしてゐます。環太平洋パートナーシップ協定(TPP)交渉が愈々日程に上り、我が國の農業に如何なる影響が生ずるか議論百出してゐます。最大の問題は外國の廉價な農産物に國內産は對抗できないといふ懸念です。しかしこの懸念は國內すべての産業に共通するもので、極端に言へば農業以外もすべてこの問題に正面から取組んでゐるのではないでせうか。さうしてこの取組みは、當時の漢學に對する國學の建設と軌を一にするものなのです。つまり外國に對して徒らにひれ伏すのではなく、獨自性を追求することこそが自國文化の獨立を擔保するものであると、眞淵は「漢意を清く離れて古のまことの意を得べし」といふ言葉で訴へ、愛國百人一首もそのゆゑにこの歌を撰んだと思はれるのです。

市川浩

文語の苑

メーラムガジン第二十四号

文語唱歌「孝女白菊の歌」

明治十年の西南戦争、日本全體に大きな影響を與へしが、この事件に伴ふ哀切さは、殊に音樂によりて助長せられたりと言ひ得べし。外山正一の詩「抜刀隊」は軍歌にまでなり、童謡としてお手玉歌や手毬歌、手合せ歌になりしは、西郷隆盛の娘の墓まゐり歌「一かけ二かけて三かけて」なり。さらには新體詩運動の提唱者井上哲次郎、漢詩にて「孝女白菊詩」を書きたるに感激したる落合直文、そを「孝女白菊の歌」なる題にて新體詩風の七五調長詩に作りたれば、その作曲者不明の短調の曲に乗せて一世を風靡す。

あらましは、西南戦争時に逃れて阿蘇山中に母と住む少女、賊軍に與せるによりてか行方知らずになりたる父を待つ内に母を失ひしが、ある時父戻るも、今のたびは狩に出でて又も長く歸らず。父を求めて旅に出でたるを山賊に囚へられしが、父に勸當され僧になりたる兄偶々現はれて救はる。二人が山路をゆくや後より前の日の山賊現はれ兄は戦ひ少女はからくも逃ることを得、祠をまつる翁媪に出會ひてそこに留まる。やがて里の長に見染めらるゝが翁の親切に謝しながら家出し、身を投げんとしたるに後より止めたるは兄なり。

戀しき故郷にと、戦に荒れたる家に戻るに父の歸りぬて、親子三人集ふことを得たり、といふもの。

勝海舟、薩摩琵琶曲「城山」を作詞し、心底より西郷の死を悼めり。「ここに平家に始まりし日本の武家、平家琵琶に滅びの調べを詠はるゝより、明治初年に最期の滅びの調べを薩摩琵琶にて奏でられたり。西郷と共に日本の何かの亡びぬること、江藤淳、『南洲殘影』にて共感す。

「孝女白菊の歌」 落合直文

その一

阿蘇の山里秋ふけて／なかめさひしき夕まぐれ／

*なかめさひしき 眺めさびしき、全篇にわたりの濁點のとられてゐること多し
いつこの寺の鐘ならむ／諸行無常とつけれたる」

をりしもひとり門に出で／父を待つなる少女あり」／袖に涙をおさへつゝ
憂にしつむそのさまは／色まだあさき海棠の／雨になやむにことならず」

ひと年いくさはしまりて／青き千草も血にまみれ／ふきくる風もなまくさく
砲のひゝきもたえまなし」

親は子をよひ子は親に／わかれわかれて四方八方に
はしりにげゆくそのさまは／あはれといふもあまりあり」

父の生死もわかぬまに／母さへかへらすなりぬれは／夢にゆめみしこゝちに
おもへは今猶身にそしむ」

*父の生死もわかぬまに 父の生死も判らないうちに
先づ日遊獵（かり）にといでしより／待てどくらせどかへらねば／またも心にたのみなく
かゝる山路にたづねきぬ」

妾（わらは）の氏は本田にて／名は白菊とよびにけり」／父は昭利母は竹／
兄は昭英その兄は／おこなひあしく父上の／いかりにふれて家出しぬ」

文語の苑

メールマガジン第二十四号

その二

をりしもあとより聲たてゝ山賊（やまだち）あまたよせきたりにぐる少女をひきとらへ／かたくその手をいましめぬ」

ひとり木陰にたゞずみて／きゝ居し人やたれならむ」

しらべの終る折しもあれ／斬りて入りしぞいさましき」／刃のひかりにおそれむとみのことにやおぢにけむ／斬られて叫ぶものもあり／逐はれてにぐるものもあり」

***とみのことにや** 頓の、急のことだからだらうか

斬りて入りしその人の／すがたはそれとわかねども／身に纏ひしは墨染の／ころもの袖と知られたり」

こゝろあらため仕へむと／ふる里さしてかへりしに／いくさのありしあとなればそのさびしさぞたゞならぬ」

その三

いのるこゝろを神やしる」／そこに柴かる翁あり／ことよしをばたづねしに／まことかなしきことなれば／翁はをとめをなぐさめて／わが家にともなひかへりけり」

翁のめくみはいとふかし／とやせんかくと人しらず／おもひまとふもあはれなり」

***とやせんかくと** かうしようか、ああしようかと（思ひ迷ふも）

妻戸おしあけ内みれは／あやしく父はましましき」／こなたの驚きいかならむ

***あやしく父はましましき** 不思議なことに父は（ここに）いらつしやる

かなたの嬉しさ亦いかに／父上さきくと音なへば／子等もさきくと答ふなり」

***父上さきくと音なへば** 父上が無事だつたかと聲をかけると

ことをこまかに聞てより／父もあはれとおもひけむ／兄のいましめゆるしやり妹のみさをゝほめにけり」／親子の三人うちつどひ／すきにし事共語りあひて

くむ杯のそのうちに／うれしきかげも浮ふなり」／父のことはをきゝ居たる

二人の心やいかならむ／うれしと兄のたちまへば／たのしと妹もうたふなり」

千代に八千代といひひひて／ともに喜ぶをりしもあれ／後の山のまつがえに

夕日かゝりてたつそなく」

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第二十四号

松平定信

八代將軍吉宗は、嫡子家重を後継となしたるも、愚昧にして虚弱なるのゆゑを以て心安からず。次男宗武に田安家、三男宗尹に一橋家を立てさせ、宗家の輔弼の責に任せんとす。

後來、家重は、長子家治を大樹と為したる後、次男重好をして清水家を興さしめ、茲に御三卿の誕生を見る。宗家の後嗣闕けたるときは、御三家に優先して、御三卿より將軍を出ださんとの意なり。

田安家を御三卿筆頭と言ふ。

田安宗武に男子三人あり。一人は早世。残れるは、長男治察（はるさと）はるあき、三男定信。

定信は英明の資にて、文武両道に長け、夙に将来を嘱望せられてあり。殊に、第十代家治の一子家基、不慮の事故に遭遇し、夭折してより後は、家治の後継に擬せられたり。

然れども、老中田沼意次、定信の才を憎みたり。この人將軍たらんには、己が権力の失墜せんことあるべしと憂ふるなり。剩へ、意次は一橋家の治済と昵懇なりき。

然則、治済が長男家斉を將軍に立つるに如く無しと為し、定信を奥州白河松平家の養子に斡旋し、田安家の辞せんとするを許さず。白河松平家は、家康の異父弟久松氏の末裔なれば、所謂徳川一門にはあらず。一門より放逐せられたる定信、將軍たるの夢は潰えたり。

田安家は宗武の血脈断絶し、後に一橋家より養子を迎ふ。大政奉還の後に宗家第十六代を相続したる田安龜之助（徳川家達）も、血筋は田安に非ずして、一橋家の末裔（家斉の従弟の子）なり。

家治薨じて、家斉襲職するや、定信は老中首座に任せられる。時に天明七年（一七八七）。この時、意次は致仕塾居を命ぜられて失脚し、翌年、失意の中に卒す。定信の復仇したるならんか。

定信は容姿甚だ優れたるを以て、大奥の女中供、「夕顔の君」と呼びて憧憬す。「夕顔」とは定信の名高き歌のゆゑにぞ斯くは讃ふるなる。

心死てに見し夕顔の花散りて尋ねぞ侘ぶる黄昏の宿

豈に凶らんや、就任するや直ちに大奥改革に着手、出費を抑制し、質素儉約を旨とせしめたり。忽ち、女供の誹謗する所と為る。已哉。

定信は、家斉の父の従弟にして、十五歳の年長なり。據りて、家斉、これを見遇すること毫も粗略の儀なかりき。

然而、俄かに齟齬の生ずるあり。

家斉は父の治済に対する孝心篤く、大御所の称号を贈らんと画策し、定信に諮問することあり。

定信は、將軍宣下を受けざりし人の大御所たる先例なしとて断乎異を立つ。時に、朝廷には、第一百九代光格天皇傍系より大統を受け、祖宗の神器を承継したまふあり。主上、御父・閑院宮典仁親王に上皇の尊号を奉呈せんと欲して、幕府に諮り給ふ。

甚だしき出費の予想せられたり。

而して、此を認めて彼を却けんには、畏き辺りに御遺恨残らずんばあらず。

翻へつて、いづれも不可と為さんには、孝ならんと欲すれば忠ならずの咎を避くるを得べし。

定信、家斉の面を犯して、大御所の件、まかりならずと言上せり。

家斉さらに執心するも、定信些かも譲るなし。

大樹、つひに怒り心頭に発し、太刀を抜き定信を手討にせんとす。（大樹とは征夷大將軍の謂ひなり）定信、文武の達人なれば、刃の下を潜りて逃るるを得たり。

文語の苑

メールマガジン第二十四号

不可思議なるかな。將軍、老中を手討にせんとまで憎みたらんには、その裁定を覆へして、自らその父に大御所の号を奉るに如かず。手討にせんか、後世に悪名あくみやうを流すこと必定じやうていなれど、独断専行するは、寧ろ、斯くの如き親を思ふ孝心より出でたるの事情あれば、世の謗りしやうを受くる謂れありとも思はれず。

家斉、何ゆゑに手を拱きたるか。

思ふに、江戸の世もこの期じに及びては、幕閣の組織強固たるものあり。既に將軍の一存にて、幕府の大事を決する能はざるに至れるなり。

さはさりながら、この事ありて程なく、定信、老中を免ぜらる。

時恰あたかも、漂流してロシアに留まること五年に及びし大黒屋光大夫くわくわう、使節ラックスマンに伴はれて帰国したる年なり。定信賊首せられたる翌々月、家斉は光大夫に拜謁げんを聴したり。

高田友

文語の苑

メールマガジン第二十四号

巴里の三ツ星レストラン(二)

LUCAS CARTON(リュキャ・キャルトン)

八区。ミシユランにてもユエミヨ(ミシユラン)と並び称される案内書(にても、巴里のレストラン中最上位に掲載せられたる名店なり。店の造りの豪華さをも勘案したる結果なれば、さもあらなん。客席数の多ければ、予約は他の三ツ星店に比ぶれば容易なり。アサヒビールの資本入りて、日本人客多し。究極の定食は、千四百フラン、料理に合はせたるワインを夫々付けたるものなり。すなはち、一、オマール海老のサラダには白ワインのエルミタージュ。二、ブロン生の牡蠣二個及びオマール海老スープには、八九年のコルトン・シャルルマーニュの白。三、仔羊とトリュフの料理には、八四年シャトーラトゥールの赤。四、フランポワーズとフロマージュブランには八七年のシャトーディケムの白、といふ具合なり。料理毎にワインをとの構想面白しとは雖も、選択の必ずしも賢明ならざる場合もあり。千百フランの定食は、一、フォアグラ。二、赤き魚。三、仔羊。四、無花果のタルト。九百九十フランの定食は、一、帆立のサラダ、二、フォアグラ・ショ(熱きフォアグラ)。三、アピシウス鴨(ビール味噌付の鴨)。四、フランポワーズとアイスクリーム。

印象に残る一品は、フォアグラ・シュー(キャベツにて包むフォアグラ)にて、素材の相性抜群、この店を代表する名物料理として著名なり。サンジャック・アン・フィロ帆立貝をカリツとしたるパイにて巻きたるものも推奨に価す。昼食の場合は、夜と共通のもの半額以下となる勘定なればお得感大いに有り。なほ、最近料理長サンドランス氏本人の不在勝ちなること稍気になるところ。(著書にサイン貰ふ際などに露呈す。)

TAILLEVENT(タイユヴァン)

八区。駐在経験の豊かなる人々ほど高き評価を下すレストランなり。就中サービスの質に関しては巴里随一の定評通りなり。ジャン・クロード・ウリナ氏(グランゼコールの経営大学院卒業)の店を取り仕切るさま見事なり。商工会議所の隣に立地することもありて、客筋のレベル極めて高し。店のワイン蔵はつとに有名なり。他店とは異なりセットメニュー無く、選ぶワインにもよれど、相当の支払金額となることは覚悟すべし。印象に残る品は、ラングステイヤーヌのミネストローネ、かき卵とトリュフのリゾットなど。安定感のある店なれど、勢ひに乏しき憾みなしとせず。なほ、突出しに冷凍マグロ供せられしことありき。

TOUR D'ARGENT(トゥール・ダルジャン)

五区。一五八二年開業の巴里にて最も古きレストランなり。一九三七年以降ミシユランの三ツ星を維持す。一九五二年に二ツ星に落ちしも、翌年には帰り咲くことを得。(一九七二年には昭和天皇の行幸あらせられ、階下には当時の直筆サイン展示せられたり。ノートルダム大聖堂とセーヌ河を眺むることの可能なる窓際の特等席あれどその予約は至難なり。邦人間にては三ツ星中この店の評価低し。屈指に価する品は、鴨のマルコポーロ(ペッパー味のクリームソース)。次いで英國エリザベス女王の好物たるクネル(魚のつみれダンゴ)。天井には穴穿たれ覗きカメラにて食事の進行状況を恰も点検したるかの如く見ゆ。平日のランチ割安なれど、雰囲気良きは夜にて、女性の着飾りて行くに相応しき店なり。伝統の味にはあれど、何時まで三ツ星を守り切れるやは不安あり。

文語の苑

メールマガジン第二十四号

欧州における青天の霹靂

かれこれ半世紀以上も前のことなりき。人生において衝撃的な出来事に遭遇せり。父の赴任地パリ最初の夏のことなりと記憶したり。父はオックスフォード大学を卒業したれば、友人欧州に多かりき。夏休みに夫婦して旅行すべく、子供たちをスイスの修道院に預けたり。吾七歳、妹五歳なり。さることとは知らず親と共にパリよりスイスマで車にて楽しくドライブせり。修道院到着後、一時間程修道女たちと親は話し会ひ、吾らに「それぢやあ三カ月後に迎へに来るゆゑ、おりこうにしたるのよ」と手を振り、欧州ではやたらに大きなアメ車のフォードは滑り出したり。妹はぎやあぎやあ泣きたるが、吾は凍りつきたまま車を見送り、これは泣きてある場合ならずと子供心に思ひき。吾らフランス語はまったく話さず、どのやうに修道女たちと交信せむや。三か月もどのやうにして過ごさんと恐怖のあまり泣かんと欲すれども、泣くだに能はず。この青天の霹靂、後にいかなる状況にありとも気丈に立ち向かふ柔軟さと強靱な精神をさ備へさせたりと、社会人になりたるとき思ひき。

今となりてはこのスパルタ教育を親に感謝するものの、その時は生きたる心地がせざりき。シヨック大きく、妹便秘になり、修道女に薬与へられ、夜中に腹こはし、泣いて吾がベッドに來たれり。七歳の吾臭き妹と一緒に横たはり、翌朝起きとてつもなき事起りしことに気がつく。シスター呼びに行し記憶あれども、その後の結末はまったく覚えたらす。吾の写真アルバムにはその修道院より両親に郵送せし綺麗なる伝語のカード残りたり。吾書きたりと覚ゆれども、自分たち元気に過ごしたるなどと書きてあり。父は常々子供柔軟にていかなる状況にてもその場所に溶け込むことありと言ひたれど、まことに然りと覚ゆ。三年半パリに住みたれば、帰国せし後、日本語いささかも話す能はず。今のごとく日本語の情報あらず、日本人少なく、手紙の航空便届くまで一週間かかりき。パリに行くにもプロペラ機にて三日かかりたり。マニラ、サイゴン、ボンベイ、カラチ、カイロ經由と記憶せり。給油するたび航空機より降ろされ、風にそよぐヤシの葉の音、カレーの香りなどところどころ記憶あり。吾パリへ行く直前右腕骨折し、ギブスせしまま旅せしゆゑ、苦勞の連続なれど、その記憶定かならず。

赤谷慶子

文語の苑

メールマガジン第二十四号

初夏来る

木々の青葉麗し。

若葉の色白、木毎に少しづつ異り、其々繊細さを誇示す。
赤き要繭も美し。

見事なる大輪の薔薇あり、其深紅天鷲絨(びろーど)の如し。左に芍薬、絹に描かれたるし。

小さき黒白の蝶ひらひら舞居る、短き命を謳歌するや。いづくを目指すや。

糸蜻蛉、水面(みなも)に尾を数回触れぬ。最早産卵の時期なる哉(かな)。

鴉(からす)のけたたましき鳴き聲あり。二羽の鴉が一羽を襲ふなり。三角関係なりや。是又愛の季節の成せる業なるか。

犬と散歩する飼主、両者の容貌何故か知らねど相似たり。犬、人に似たるか、将(はた)又(また)人、犬に似たりや。

日没遅く為りて夕日を楽しむ時間の増えたる感あり。明日も又良き日を楽しまん。

仲 紀久郎